

日本労働年鑑 第53集 1983年版  
The Labour Year Book of Japan 1983

第二部 労働運動

XIII 政党

5 民社党

3 大会

佐々木委員長、中道結集の維持を強調

民社党第二七回定期全国大会は八二年二月一七日から三日間、東京・九段会館でひらかれた。この大会では人事問題はなく、かねてから中道勢力の結集につとめてきた民社党が、公明、新自由ク、社民連各党との選挙協力の推進など「中道結集」をさらに具体化することをもちこんだ運動方針の決定などが主たる課題であった。ところが、大会直前の二月一五日、F4ファントム戦闘機の爆撃装置問題で空転していた国会で、それまで民社、新自由クと同一歩調をとっていた公明党が、自・社両党に同調して審議に加わったため、中道結集の中軸に亀裂が入ったかたちとなった。そこで、この問題にたいし、民社党大会がどのような対応を示すかが注目されることになった。

大会冒頭、あいさつに立った佐々木委員長は、この問題について、「中道四党の足並みが乱れたことは遺憾だが、これを試行錯誤のひとこまと受けとめ、今後の相互努力によって昇華しなければならない」とのべ、中道四党の結集という従来の目標に変わりがないことを表明した。また、佐々木委員長は、今後の政局について、参院選と統一地方選がある八三年を待たず「八二年後半は政局に何が起こっても不思議ではない。六、七月がその転機になるのではないか」とのべ、年内総選挙の可能性を示唆し、政局の変化に即応できる心構えと準備を求めた。このほか佐々木氏は「政治活動の原点は辻説法である」とし、党活動の重点を「国民に向かっての直接的運動路線に置く」とし、運動の柱として、(1)核軍縮を中心とする世界平和への訴え、(2)行革、減税の断行を政府に迫り、政官財癒着の政治体質の一掃、(3)中道勢力の総合的大結集を急ぎ、政治の流れを変える——の三点を示した。

公明党委員長あいさつ

委員長のあいさつにつづき、竹入公明党委員長、宇佐美同盟会長、山口新自由ク幹事長、田社民連代表、宇佐美同盟会長、中村政策推進労組会議運営委員、関民社研議長、中村全国農民総連盟委員長、森田全国中小企業団体中央会組織委員長らが来賓としてあいさつした。竹入公明党委員長はあいさつのなかで「この二、三日の事態は、私が民社党の佐々木委員長や春日常任顧問にたいするただ一回の造反だからお許し願いたい。中道結集の方向は原則的、大局的に何ら変わるものではない」と釈明した。なお、大会の裏舞台で民社党側は公明党との関係修復にたいへん気をつかい、前日のうちに春日常任顧問が竹入公明党委員長に電話で連絡し、大会での佐々木委員長あいさつで「中道四党の足並みの乱れは遺憾」と言及することを伝えたほか、代議員にたいしても竹入委員長にヤジを飛ばさないよう指示したという(『毎日新聞』二月一八日付)。

## 大会経過

大会第一日の午後は塚本書記長の党務報告、永末国対委員長の国会活動報告、渡辺総務局長の決算報告、木下会計監査の会計監査報告、安里統制委員長の統制委員会報告がおこなわれ、質疑ののち各報告を満場一致で承認した。ついでつぎの四議案の提案説明があり、質疑ののち諸議案を三つの分科会に付託することが決定された。(1)一九八二年度運動方針(塚本書記長提案)、(2)一九八二年度組織活動方針(柳沢組織局長提案)、(3)一九八二年度重点政策大綱(大内政審会長提案)、(4)一九八二年度予算(渡辺総務局長提案)。以上で第一日の議事を終え、その後、懇親パーティーがひらかれた。

第二日は、運動方針を審議する第一分科会、組織活動方針と予算を審議する第二分科会、政策を審議する第三分科会にわかれ、終日討議がおこなわれた。

第三日は各分科会の報告をうけ、若干の質疑のあとで各分科会報告をそれぞれ満場一致で原案通り決定した。このあと、つぎの決議案が提案され、それぞれ満場一致で採択された。(1)核軍縮運動の推進にかんする決議、(2)行財政改革の徹底推進と所得税減税にかんする決議、(3)参議院全国区制度改悪反対にかんする決議(以上本部提出)、(4)政治倫理の確立にかんする決議、(5)ポーランド問題にたいする決議、(6)北方領土の返還を求める決議、(7)中小企業承継税(事業用資産の相続税)制の速やかなる実施を求める決議、(8)国鉄の合理化徹底と再建を求める決議、(9)農業危機打開・基本農政確立にかんする決議、(10)農業者年金制度の改善にかんする決議(以上県連、支持団体提出)。

このあと党員表彰があり、党勢拡大に貢献した個人一四八人、団体四七、それに特別表彰として三人の故人が表彰された。ついで、八三年の参院選の第一次公認候補として全国区四、地方区三の七候補が壇上で紹介され、最後に佐々木委員長の閉会あいさつ、大会宣言の採択で三日間の大会を終えた。佐々木委員長はあいさつのなかで、「来年は統一地方選と参議院選がある。そして早ければ今年後半か、遅くも来年中には衆議院解散・総選挙がある。八三年政治決戦で政治改革を成就するよう立ちあがろう。本大会はその出陣式だ」とのべた。

## 主要な大会論議

党務報告や運動方針などにかんする質疑討論のなかではさまざまな問題が議論されたが、なんとも注目をされたのはF4ファントム問題で独自行動をとった公明党にたいし、代議員のあいだから強い不信、不満の声が相次いだことであった。すなわち、(1)公明党の背信行為は一片の「試行錯誤」では片づけられない。今後、一朝事ある時、中道結集はガラスの城のごとく崩れることはないか。中道四党で基本理念につき確固とした意思統一をせよ(東京都連・荒瀬代議員)、(2)公明党の態度は「試行錯誤」ではすまされない。中道結集に逆行するものだ(神奈川県連・高島代議員)、(3)公明党の真意はただしたのか(福岡県連・小山代議員)、(4)F4をめぐる公明党の態度は重要な問題だ。お家の事情も、試行錯誤もあろうが、そう簡単にすまされない(東京都連・小山代議員)といった意見がつぎつぎに出された。これにたいし執行部側は、(1)端的にいつて(公明党がなぜあのような行動をとったのか)私にもわからない(佐々木委員長)、(2)公明党の腹がわからないまま事態は推移してしまった、というのがほんとうだ。各党の主体性もある。だから、それについて、どうのこうのはいえないのではないか。佐々木委員長は「代議員の皆さんより腹が立っている」といつている。その言葉をよくかみしめてほしい(塚本書記長)、と公明党にたいする不満を表明する一方で、「中道結集」路線維持の重要性をくりかえし強調して、つぎのようにのべた。(1)民社党にたいする評価も十年前とは変わってきた。中道結集もやっと理解されてきた。ここでスパッと切ってしまったら、いちばん喜ぶのは五五年体制の担い手である。自主路線の強化は排他性の強化ではない(佐々木委員

長)。②中道四党の結集は合意には達しているが完了したものでない。いま達成の過程にある。政党にはそれぞれ歴史と伝統がある。われわれは小異を残して大同につこうとやっている。その過程で試行錯誤はある。誠意をもって昇華させることだ。公明党は安保条約も必要、自衛隊も必要と民社の方向にアプローチしてきたし、対韓政策についても竹入委員長が訪韓され、民社と同じ行動をとっている。公明党としては容易ならざる行動を積み重ねてきている。評価すべきだ(春日常任顧問)。

また、「非核三原則」の問題で、代議員が「国民は、核の通過、寄港は認めている。民社が決断し、政府をリードすべきだ」と主張したのにたいし、執行部は、①党の方針である非核三原則は変わらない。しかし、核運搬の方法が一〇年前とまったく違った現在では、通過、寄港も持ち込みになるのかということを政府に提起している(塚本書記長)。②正論であっても、いいことと悪いことがある。政治判断が必要である(渡辺総務局長)などと答えた。

このほかでは、一年間、中央委員会が一度もひらかれなかったことについて代議員の批判があいつぎ、婦人党员、婦人議員の拡大にたいし党本部の積極的なとりくみを要望する声も多かった。なお、この大会での委員長あいさつの全文は『週刊民社』二月二六日付に、質疑討論の詳細、大会決議、大会宣言などは、同三月五日付にある。

日本労働年鑑 第53集 1983年版

発行 1982年11月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2001年9月4日公開開始

---

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1983年版(第53集)【目次】 次のページ → ■  
日本労働年鑑【総合案内】

---

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)

---